



静子日記

13
2947
28



年

廓とと守比序



比沙喜三大人曰能主孫曲我

實識あつて詳知やしし蓋欲

を知つて實をとりかた可也不者ハ

寧千痕穴をとり見適は穿穴の飛

乃其也故は十分通衆の口交回



お 30/9



倂しやう多たちちおおままとと備びもももも技ぎをを考かうてて悪あく
解かいとと吐つ道どうとと虎こをを事じしし小せう廉れんをを考かうてて腹はら
空あ敷きとと空くう妓ぎ鼓こふふ忌ぎ妬たふふとと専せんとと畫わくくいい
今いま十じゅう返へん舎しゃがが料りょう持ぢとと濁じやく
ささるるふふとと元げんととちちぎぎにに解かいとと何なにもも自じ

本

元げん空くうのの余よ情じやう温うん積せき形けいをを且かつととぬぬをを
熟じやく空くうせせババ前ぜん稿かうをを觀かんてて今いまはは小せう廉れんをを
殘ざんのの文ぶんああるるをを以もつてて此こゝにに注ちゆうしし以もつてて大だいにに
調てうとと雨う

調 糸 後 織







維時と子知二歳

壬戌孟夏吉辰

十返舎一九織



倡客生る路
傳授之卷

廊意と氣地

十返舎 或着

○第一回

あやうくの女おどろの髪と揺れし。夜をくろく
破屏風を同じせ死病の床あつどと足てみ
吹くむらさきおどろの生ひる市振の砂因と殿
窓令くろく山甲の院住長安を山も昔むして
名本和桂の枝みゆ死形をさる案のたふ任ふ寂々
あやうくの女おどろの髪と揺れし。夜をくろく

コボロ目とあらう [た] むんまき [ま] だうりよさぬり [ま] よし

こくも令ごふの。それもここの方うしてらんさるる。死

ぬてんのむーかせう [ま] + げなるふそら秘が [ま] りの

あるまのぐ。そのういまた [院] にはこれせうく。伊^いこらんが

りつてきて。ちさうこののと [ま] そんるるんまこトク^{とく}を

してゆぐ。おのいすま [ま] ちのぬののみ。まうがなるいりていまや

[ま] まのびぐらさせてト^とな。あゝまをなすのりてらんふ

[院] らぬももうさんおさむるうふ [ま] ちごまうてらんれアノ

何こやろうめ。まどをであらざるらんどもあいの

わん。おらうとをのりてらんらんウあまき。そんるるちん

このまがりまするん ト^とちまうちのういまたをひし

ちまよ入んものやうい [ま] ちのいぬまし。この入はせまて。

こればアあまきがちんども^{かん} 握挿^{おけ}が出るい人 [院] アレサ

そんるらふらんこと [ま] ちトあやまら。そんるらう出ん

トよこちまふらうてそらうく出てゆりちがひて入まのいどりの

ちまよのみて答ハ [伊] ちらんるるどいゆやあづーとらんあまきんどの

ひらんむまきやうらんふあくのういひまをまうんこじぬのこをて

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of several lines of text, with some words enclosed in small square boxes. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. It also consists of several lines of text, with some words enclosed in small square boxes. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language.

かゝるものよめかゝる里 **里** おかやぐら トは四つにわかれ
その中の一つ

若者 たうたき 初見さんち たうたき **若** さん トは四つにわかれ
その中の一つ

初 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

かゝるものよめかゝる里 **里** おかやぐら トは四つにわかれ
その中の一つ

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

若 たうたき **若** たうたき **若** たうたき **若** たうたき

今め〜してやうや〜おひつて〜トウ入と **茶** 中ごん
 しの〜よおさう〜やう。 **茶** 人い〜ごん **茶** 日本は

の〜で〜る中 **茶** 所ちいび〜〜も〜ら〜
茶 人々 **茶** 中〜で〜る中。 **茶** 由仲の志を〜く。

何知 **茶** 中〜で〜る中 **茶** いるえ〜ら〜中 **茶** 前
 といん〜ん〜い〜ら〜 **茶** コレハ又〜い〜の〜も〜る〜

茶 コシい〜ん〜 **茶** コレハ又〜い〜の〜も〜る〜
茶 コレハ又〜い〜の〜も〜る〜

そ〜の〜ト〜せ〜あ〜ち〜や〜あ〜う〜ま〜う〜は〜あ〜ご〜

と **茶** う〜と〜う〜 **茶** 一〜と〜 **茶** 一〜と〜

○ 第三回

そ〜の〜月〜の〜里〜と〜る〜物〜ら〜と〜あ〜が〜

つ〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

と〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

山〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

秘〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

とろろろ。とろろ。のるんのまじつろ。 [宛] モトがぞるんしそ人 [伊]

ぞみもち秘入がせんてちうとあんが人のろろ入はほが

まがでてん入申こ [宛] ヤヤそぬまららさうがおざんす

さう人のまのまづらうんで持まう かのまもくくさんぐおよこ

一さんこあ妙はほの礫と。こまよそくまうでござら

ひま トよだるまいては伊 [伊] むんよらくさうぶごまら

これぞ。ららがせんくこまのいよぶご [宛] ころちがくおめ人

がうてなるむむらりやうして。そぬがあまだたな人まごらう。

のみちんあもやらさめ人。ちうこらとまづりちんまてい。

あまはほがこめ入まらう。ころちいとむらてあこらうまが

よんちえん [伊] じんがめりよあくらと [宛] りるおんが。

まのめやらさめ人 [伊] ちるもつぬて来てあせようち

[宛] ソッパアぶふく人 [伊] ころちが内へ来ていろう [宛] むん

ふく。そんまうくさんい。い。田をよおちんまき人 [伊] ち

あうらう。アそぬの痛れもまらわうようらうらう。

おるこへに戸でまらこでもさせられらう。まのこらまらう

おらんぢやん人 伊 うーこせうしやう 宛 ちやうしやう

まうそく今。そらうんちやうしやう 伊 ちやうしやう

宛 アノ子。ヨウちが年があスー 伊 ちやうしやう

伊 ンヤア 宛 おちく 伊 ちやうしやう 宛 ちやうしやう

ちやうしやう。おちんちやうしやう 伊 ちやうしやう

ちやうしやう 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

ちやうしやう 伊 ちやうしやう 宛 ちやうしやう

ちやうしやう 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

伊 あいせらるめんの 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

うーつ 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

の 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

し 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

い 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

ち 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

ち 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

ち 宛 ちやうしやう 伊 ちやうしやう

櫻の皮の二癖有り。毎年のうらぶらぶの皮情をほく。
此の皮も亦支らるべし。茶だてに入らざるべし。
その皮は実より皮より入のちまうあて。茶の皮は
同である。
或人のいづくかの皮の骨は皮の皮まよふ色里
さくらもいろざとあやう

依株のうそもまともあり致うころ
そむのまざどのまやくのうざく

○ 廿四回

鶏とまふりの狸とさぐ樹と柱ののへ鹿と鹿

欽楽の定るとれへ必死に若くありか流が今の後も。
むり子猪る物思ひ何ん帝がはやくとあり。馬あくと
ぬ紋持ふは定ると色はひうれ。長流してゆきざれい
くも思ひ羽のさうのあきまふ打叩てはりく病の床

伴三回お流母歌小列れてより。さてふよかひ焦れ。伊
が情ふあひ。孫は江戸小いざなれ。史婦とやう。今又保
定は傳る。此とあり。さ。枯本よ死さ。祥ひのささ
ろこび。物々他もさく。はるる。はるる。花散がひと。ち
あか。さ。思ひま。怪。せ。お。は。ま。れ。り。も。男。は
控。れ。て。身。と。よ。ま。ま。ま。も。な。り。と。れ。れ。と。思。ひ。ま。り。て

はりのりくしゝの病とちりゝるへ何らうが母あやと意ん尼よ
あのかるこが控えよようそひて

意ん

せんやく

寸伯さんのかたうけいよどちりともようアちんぞんぶ

ちりぬら

おは

まぶご何もいづいござりませぬのみあうこ

ヤチ

お休まをよみませ意んも移よよとおりてもそらこ

の病もづらうふりて移れませぬそれゆゑわい

こよん

おんり

ちんちや あやい

いん

ま

くももえあるまの女程へ侮つてらうが目見の使入よど

ひつまきりいせ

早まき店へ控八が何もうも引りけてらぬこそそらうあう

クキキ

けおを愛とらうはひい(入)らる村をまき目のすや信よ

ナツもせざとまんをててたら京をいひこりうが若さかも

ひんち

ひんち

そらこの病ももろその能辨うしちことまんざら

む

いん

る麻りの女を産け移どその女ゆへさるぐのあらう

ま

つひ

とらうして屍の志まひへ又じんを控い目とせよあう

めんよらうとむあうませぬ トなまをいひくはらうあひも

おん合

おん合

ぐらやあういん母あやいんロクンよーのあやいんあやの

あやのあやいんあやのあやいんあやのあやいんあやのあやいん

あやのあやいんあやのあやいんあやのあやいんあやのあやいん

そむ つま まて。よりの
中もきまるとは、女房よりぬきひねり。いふじらんは、思ひ
かこふ。うん
ちるはも、級であらねば、いづれのが、あるが、思ひのくさるるに。
いとち なが そち あん こが
金と割り、地して、安ほじ、ぬきまをりつたり

まぐ びまき よそか
定まる、たぬ、は、寝い、とら、ご。ま。びやう、は、世を、ま。うて
ちんごう、う。ろ、と、な、く、あ、う、は、な、は、あ、の、の、と、な、て。
う。う、つ、あ、ま、を、中、よ、い、だ、の、の、の、あ、の、ひ、ち、や、あ、る、西、施、は、う
い。い。い。
唐吉氏、海、業、の、る、よ、志、と、れ、あ、ふ、と、よ、と、極、た、の、め、く、は、世、を
の、身、も、ち、う、さ、た、も、城、の、ち、ま、ま、と、ご、う、い、雪、の、あ、の、て、よ、う、
後、の、こ、ご、れ、う、う、く、く、と、あ、の、ひ、ち、や、あ、る、を、思、極、は、屋、
り、ち、あ、り、さ、う、し、ら、い、と、

名山 あまのやま かしら、おら、う、ん、の、そ、ま、く、何、園、と、ら、う、う、の、あ、ん、ま、と、

ん、同、う、つ、い、む、う、う、よ、又、お、ら、お、入、つ、極、へ、と、や、い、せ、う
う、け、こ、ぬ、り、ぬ、ば、ゆ、よ、ま、こ、せ、い 其、又、さ、ん、が、あ、の、あ、い、う、ん、の ひ、う、う、あ、ら、う、と、う、い、
お、あ、り、あ、ん、し、こ、さ、よ、う、さん、ま、ら、それ、と、い、ふ、も、あ、ん、ま、う、い、さ 伝、こ
さん、よ、此、と、い、れ、ち、な、ま、い、ぶ、ん、ま、内、地、を、も、あ、ん、の、う、の、こ
う、ん、さ 等、の、あ、る、こ、も、よ、の、あ、も、ま、ん、だ、ん、せん、と、う、あ、ま、ご、ん、ま、あ、ん、よ、
今、よ、身、の、は、ま、う、う、よ、お、あ、ん、と、せ、う、こ、ち、も、い、う、と、そ、れ、が、は、い、
ち、う、ア、う、ら、う、ご、ん、ま、これ、も、い、う、あ、ら、う、ま、あ、り、 **花** はな 人、よ、其、う、さ、ん、が、は、い、

後備客晦日月

一九〇着
全一冊
近刻

青月樓十炷香之記

同作
同

少田時各々のまはるのまはるし彩多まはる各自の
密の在るまはる押のまはるを加へてあふるを附録十区舎
戯のまはるまはる記のまはるのまはる地あるとまはる

1145

正
19

Handwritten notes in the center of the left page.

コレニヤ
之師言丸地
ト
一
二
三
子

